

これからの医薬品卸の役割について

座長
北海道薬剤師会副会長
清水大
北海道薬剤師会理事
藤井則明

わが国は世界に例のない速度で少子高齢化が進んでいる。そのような中、「団塊の世代」が後期高齢者となる2025年までに国策として、地域包括ケアシステムの完成が急がれている。

さらに「団塊ジュニア」と呼ばれる世代が後期高齢者に到達するであろう40年には日本の人口は約1億1000万人に減少。1.5人の現役世代(生産年齢人口)が1人の高齢世代を支える形になり(国立社会保障・人口研究所、17年推計、出生率・死亡率中位仮定)、25年に比較して医療・介護・福祉の支えて手が大きく減少すると推測されている。

現役世代の大幅な減少に加え、都市部に比べて地域では人口そのものの減少が顕著になるだろうと予測されており、都市と地方の経済格差に加えて、あらゆる業種で人手不足が進行すると思われる。

また、発生頻度が高まっている「震災」と「自然災害」も忘れてはなら

ない。震災は、阪神淡路大震災・東日本大震災・熊本地震・北海道胆振粒地震など、自然災害は、線状降水帯による集中豪雨、台風による災害、猛暑における熱中症などが挙げられるだろう。

20年初頭からは新型コロナウイルス感染症が拡大し、新たな対応が求められている。特にクルーズ船「ダイヤモンドプリンセス号」への対応や、その後のマスクを始めとした防御資材の品薄などは記憶に新しい限りだと思う。医薬品卸は、地域における安定供給そして災害時においても遅滞ない医薬品の供給をいかに行うかなど、最大限の対応が求められるようになってきている。

薬機法改正に伴い、「医薬品流通に関わるガバナンスの強化」が21年に施行されるが、厚生労働省から発出された医薬品の適正流通ガイドラインでは、「卸売販売業者における自主的な取り組みを促す」としている。

医薬品卸売販売業者および薬剤師として災害等に対する情報、医薬品の輸送技術・温度管理・在庫のあり方を踏まえつつ、現場での取り組み方や課題についても展望したい。

(清水大)

分科会の見どころ
聞きどころ

関連記事
10、15～17ページ

がん薬物療法の医療連携における薬剤師の役割

座長
日本薬剤師会常務理事
有澤賢二
北海道薬剤師会常務理事
遠藤一司

厚生労働省が公表した「患者のための薬局ビジョン」では、癌などの高度薬学管理機能薬局が示されたが、健康サポート薬局のような話題にはならなかった。ここにきて薬機法改正で、患者自身が自分に適した薬局を選択

できるよう、癌などの専門的な薬学管理に医療機関と連携して対応する専門医療機関連携薬局の認定制度が創設された。

癌薬物療法は、新規抗癌剤や治療法の開発により、治療効果が期待される一方で、薬剤師には副作用による治療の中断や患者の不安に対応する行動が求められている。

本分科会では、薬局と病院の薬剤師が連携しながら、癌患者にどのように介入するのか、その方法や役割につい

て議論する。

基調講演として、日本臨床腫瘍薬学会の松井礼子先生から、病院と薬局の連携における癌薬物療法の現状と専門医療機関連携薬局制度の発足に向けた認定制度などの学会の取り組みについて講演いただく。

帝京大学薬学部の安原真人先生は、経口抗癌薬による治療や疼痛管理にプロトコールに基づく薬物治療管理(PBPM)の手法が外来治療時の病院と薬局の連携に有効であった研究班の活動を紹介します。

長崎県薬剤師会の中村優先生は、薬剤師会と長崎大学病院との間でICTネットワークを活用し、PBPMを行い、対象患者の58.3%から副作用

を確認した取り組みを紹介する。

KKR札幌医療センターの玉木慎也先生は、癌診療連携拠点病院と薬局との連携による癌患者介入、勉強会、トレーニングレポートなどの取り組みを紹介する。

クオール薬局の村田勇人先生は、薬局薬剤師による電話による患者フォローアップやその結果のトレーニングレポートによって患者QOLの向上につながった取り組みを紹介する。

病院と薬局の薬剤師がどのように患者に介入することが、癌薬物療法の質を向上し、患者が安心して治療を受けることができるのか、総合討論でも議論したい。

(遠藤一司)



薬局経営のお悩みに、Melphinが効く。



継続的服薬フォローにもいち早く対応

新たな時代の薬局経営に

Melphin ネットサービス∞

保険薬局システム

調剤 Melphin®/DUO

メルフィン・デュオ

インターネットサービス 検索 <https://www.mdsol.co.jp/melphin/>

三菱電機ITソリューションズ株式会社 MDSOL

「第53回日本薬剤師会学術大会」に出展します
ロイトン札幌 3F ブース番号 JF-1